

2004年度3学年国語 2学期中間考査

この問題用紙は「ファイル」として後日「ファイルと一緒に提出すること。」(とじていない場合はファイル提出不合格となる。)
字は丁寧に濃く書くこと。極端なくせ字、汚い字、読みとれない字の場合は減点の対象になる。
漢字を使うこと。常用漢字を書かない場合、減点の対象になる。
文章を書くときには句読点「。」や「、」を絶対に忘れないこと。
全ての解答は解答用紙の決められた解答欄に記すこと。

次の問いは夏目漱石著「こころ」のストーリーに関する問題である。それぞれの問いに対して、正しいものを一つ選び記号で答えなさい。

Kは私にお嬢さんへの気持ちを相談するのに、まずどこへ行ったか。

(ア) 図書館 (イ) 古本屋 (ウ) 私の部屋

Kの話聞いて、私がKに言った言葉は何か。

(ア) 精神的に平常心のないものはばかだ。
(イ) 精神的に向上心のないものはばかだ。
(ウ) 精神的に羞恥心のないものはばかだ。

Kの生まれた家は何をしていたか。

(ア) 医者 (イ) 政治家 (ウ) 僧侶

Kの平生の主張とは何か。

(ア) 恋は道の妨げになる。
(イ) 結婚は勉強の妨げになる。
(ウ) 教育は恋愛の妨げになる。

Kが私に相談した日の深夜、何があったか。

(ア) Kが自殺していた。
(イ) Kがぐっすり寝ていた。
(ウ) Kが私の部屋を覗いていた。

Kが口にした「覚悟」を何の覚悟と私は解釈したか。(Kが相談しに来た次の日の時点で)

(ア) 実家に帰る覚悟。
(イ) 自殺する覚悟。
(ウ) お嬢さんに気持ちを打ち明ける覚悟。

私も最後の決断を実行するために、どのような手段をとったか。

(ア) 道端でお嬢さんに詰め寄った。
(イ) Kを待ち伏せした。
(ウ) 仮病を使った。

お嬢さんは私との結婚をどう考えていたか。

(ア) 承知していた。
(イ) 承知していなかった。
(ウ) どちらでもよかった。

奥さんがお嬢さんと私の婚約のことをKに初めて話した時、Kは最初に何と言ったか。

(ア) そうですか
(イ) おめでとうございます。
(ウ) 結婚はいいですか。

Kの遺書に書かれてなかったのは次のうちのどれか。

(ア) お嬢さんへの想い。
(イ) 奥さんへの謝罪。
(ウ) 自殺する理由。

次の各問いに答えなさい。

問一、次の各文の傍線部を謙譲語に直しなさい。

大変ごぶさたをしている。
不可解な話を聞く。
夕食を食べる。
手紙をありがたく見る。

問二、次の各文の傍線部を敬意の含まれない表現(普通の表現)に直しなさい。

一心不乱に勉強いたします。
その事実は存じ上げています。
そちらへ必ず伺います。

問三、次の漢字の読み方をひらがなで書きなさい。

家鴨	百足	河豚	烏賊	土筆
紡ぐ	潤う	繕う	催促	潤沢

次のそれぞれの文から、メタディスコースを除き、文意が変わらないように文章を整えて書き直しなさい。

問一、

野球のことは難しすぎて私にはわからないが、何とかして書こうと思う。野球は国民的スポーツになっていると思うので、話し合って解決してほしい。

問二、

私がこの記事で書くように編集者から提示されたテーマは、情報教育であった。ここで私が主張したい最も重要なことは、情報教育が学校でうまく指導されるためには、まず教員自身が情報化されなければならないことだ。しかし、私が見るところでは、教員自身の情報化は悲惨なほど進んでいない。これが私の考えの出発点である。

問三、

手紙を書く習慣を失ったとは、手紙の型を知らない、あるいは型に慣れていない、ということだ。手紙の型とは、紙質やあて名の書き方、さらには書式・文体・用語にまで及ぶと思われる。私たちはそれに慣れていないのではないだろうか。手紙を書こうと思いつても、さて、どう書き始めようか、と迷ってしまい、結局やめてしまうというケースも少なくないように思われる。

次の文章を読み、後の課題について作文を書きなさい。

近年、ホタルあるいはホタルの里づくりが、全国各地で静かなブームを呼んでいる。なぜであろうか、少し考えてみたい。

ホタルの里づくりは、首都圏では、横浜のほか、東京の江戸川区、世田谷区、福生市、日野市、それに皇居、神奈川では箱根、湯河原、秦野、厚木などで行われている。そのこと自体は、すばらしいことなのだが、今進められている「ホタルの里」づくりには、賛同し難いケースが多分にある。つまり「ホタルの里」が本来の里とは関係なくつくられているケースがあるのである。

ホタルは、一見、弱々しく見えるが、なかなか強い生物である。えささえあれば、飼育に特段の難しさはない。産卵は水槽で行えるし、幼虫も台所用用品のプラスチックのトレーで飼える。あと、土菌を作る場所をつくってやりさえすれば、ビルの屋上でもホタルを飛ばすことはできる。

大変なのは、えさとなるカワニナの補給、それに大量に発生させるとすれば、流水の確保である。カワニナも、野菜くずを与えておけばよく、飼育自体は簡単なのであるが、今のところ人工繁殖には成功していない。それゆえ、カワニナのいない所では、よそから運んできて補給しなければならないし、水のない所では、井戸を掘り、水をポンプで循環させることが必要である。

だから、反面、労力や電気代などの費用は掛かるが、それをいとわなければ、「ホタルの里」をつくること自体は、どこでもできる。そのために、「ホタルの里」づくりが、ちょっとしたブームとなっているのであるが、そういった人工孵化、えさの人為的補給、人工水路による人工的「ホタルの里」には、幾つかの問題がある。

まず、一つは、なかなか続かないということである。技術的には簡単なのであるが、人工的な場合には、労力と費用がばかにならない。中でも、労力の確保が大変である。ホタルが好きな人でないと続かない。事情でその人がいなくなると、「ホタルの里」もいつの間にか消えていくということになる。二、三年でつぶれていったケースも多いと聞く。

もう一つは、「ホタルの里」の意義に関することである。人工的「ホタルの里」は、言うなれば動物園的発想である。確かに、それでも、よその生息地から集めてきて見せ物とするよりは健全である。ホタルを忘れた人人にホタルがどういう昆虫であるかを教え、思い出させてはくれる。そういった教育的な効果はあるが、それ以上のものではない。

ホタルが、私たちに感動を与えてくれるのは、ただ単にその光だけではない。ホタルはその一生のうちに陸上と水中の異なった場所で生活しており、つまり、よい緑だけでも、またよい水だけでも、どちらか一方だけでは自生できない。よい緑と水が兼ね合わせた優れた自然環境の中でしかすめない。従って、ホタルのいるような所には、魚もトンボも力工

ルも、様々な生き物がすんでいるのである。

ホタルが感動を呼ぶのは、ホタルの光だけでなく、その背景に優れた自然があるからである。環境からホタルだけを抽出して人工繁殖しても、幽玄な趣や感動を呼び起こさないのも当然である。

都市に今必要なのは見世物としての「ホタルの光」そのものではなく、ホタルのすむような「自然」である。昆虫を見ることではなく、自然に溶け込み、自然と触れ合うことである。「ホタルの里」づくりが目指さなければならぬのは、ホタルが自生できる環境をつくることである。汚濁や農業あるいは河川改修で絶滅した水辺にホタルを呼び戻すことではない。残念ながら、人工的な「ホタルの里」づくりは、思想を欠いていると言わざるを得ない。

【課題】

著者は「ホタルの里」作りブームをどうして批判しているのか。それに対しあなたはどうか考えるか、意見文を書きなさい。